

恋人 さい みん!

お堅い武家娘と
イチャラブ相互催眠

立ち読み版

小説 上田ながの
挿絵 高瀬むう

序章 幼馴染みはお堅い風紀委員長

第一章 発見したのは催眠教科書！

第二章 和彦……わ、私に……○○しろ

第三章 か、和彦は私の恋人だ……。

第四章 今日だけだ、明日からはもう止める……。

第五章 私を……お、犯せッ!!

第六章 ずっと……ずっと好きだった……。

終章 ひたすらラブラブ♥

006

016

038

072

106

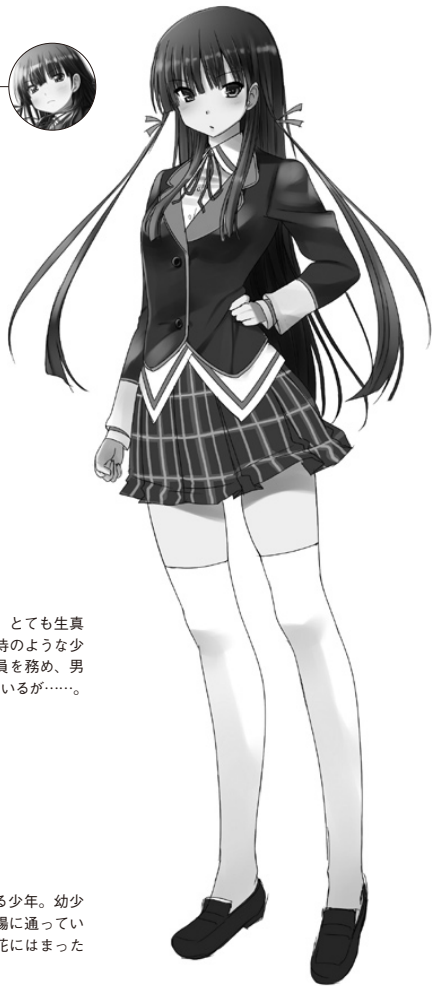
138

184

205

登場人物紹介

Characters



むらさめ きょうか

村雨 鏡花

村雨道場の一人娘で、とても生真面目でお堅い性格の侍のような少女。学園では風紀委員を務め、男女交際を取り締まっているが……。

するが かずひこ

駿河 和彦

ごく普通の学生である少年。幼少期より鏡花の家の道場に通っていて、先輩にあたる鏡花にはまったく頭が上がらない。

が溢れ出した。

全身を幸福感にも似た脱力感が包み込んでいく。

「あ……はああああ……」

否定しようもなく、鏡花は達していた。

「鏡花ねえ絶頂った？」

無邪気な子供みたいな顔で尋ねてくる。

「……う……あ、ああ……。絶頂った。絶頂ったよ……」

最初は否定しようかと思っただけで、なんだかその顔を見ていると嘘がつけなかった。恥ずかしさに顔を真っ赤にしなから、頷く。

「よかった。へへ、僕でも鏡花ねえを気持ちよくしてあげることができたんだね。本当によかった」

すると和彦は心底安心したといったように大きく息を吐いた。

「大好きな鏡花ねえを気持ちよくしてあげたかったんだ」

真っ直ぐこちらを見つめてそんなことを真顔でいつてくる。

ドキンッと胸が鳴った。それと同時に、何故だか視線は自分の上に覆い被さるような体勢でいる幼馴染みの股間へと向く。制服ズボンには内側から大きく膨らんでいた。

「……く、苦しそうだな」

「え？ あ、ご、ごめん……」

慌てて隠そうとする。その姿がとても可愛らしく、愛おしい。自分だって気持ちよくなりたかっただろうに、それよりもこちらを気持ちよくしようとして一生懸命だったんだ——というところにここで気がついた。

「好きだという気持ちが一気に増幅していく。思いのままに、今度は自分からキスをした。んっ……んちゅっ……。ちゅうう……」

自ら積極的に舌を挿し込み、和彦の口腔を貪る。唇を離すと唾液の糸が唇と唇の間に伸びるくらい濃厚に……。

「きよ、鏡花ねえ」

驚いた様な表情を浮かべる。

「その……し、していいぞ……」

恥ずかしさを覚えつつ、そんな幼馴染みの頬をソツと撫で、優しく微笑みかけた。

「こ、こんなことになったのは私の責任だ。だ、だから……か、和彦の苦しみを取り除いてやらないといけない。や、やったことの責任は取らなければならない。村雨家の跡継ぎとしてと、当然の義務だ……」

「ちゅうっ……んちゅう……」

残った理性の言い分けを聞きながら、もう一度キスをした。

軽いキス。その後、二人で身に着けていた服を脱ぐ。互いに生まれたままの姿となった。
(お、大きい……)

視界にピンピンに勃起したペニスが映る。ちよつとした短刀くらいの大きさはあるのではないか？ 想像以上の大きさに、思わずゴクリッと息を呑んだ。

ただ、だからといって自分のことを強く想ってくれている——例え催眠の効果であったとしても——和彦の為にも今更引く気はない。

鏡花は布団の上で仰向けとなり、羞恥を覚えつつもソツと足を左右に開いた。

それほど濃くはない陰毛に隠された秘裂がクパツと開く。ピンク色の柔肉が覗き見えた。襞の一枚一枚が愛液に塗れている。呼吸に合わせて媚肉が淫靡に蠢いた。

「本当にいいの？」

「も、勿論だ」

緊張と羞恥で心臓が爆発しそうになりながらも頷く。

「……そ、それじゃあいくね」

クチュツ……。

「んくっ」

こちらの許しを確認すると共に、肉先を膣口に密着させてきた。熱く、硬い肉棒が膣口を押す。当然そうして触れるだけでは終わらない。ゆっくりと腰が突き出された。

「あっ！ ふっく。うんんん」

ぬじゅっ、じゅぶううう。

巨棒が膣口を押し広げる。肉襞の中にズブズツと沈み込んできた。

「は、挿入^{はい}って来た。わ、私の腔^な中^{なか}にか、和彦のペ、ペニスが挿入^{はい}って……。お、んんん。大きい。む、無理だ。こ、こんなの挿入^{はい}らない」

まるで自分の身体に巨大な杭を穿たれているかのような感覚が走る。息が詰まった。

「ふぐっ、そ、それ以上はむ、無理だ」

「大丈夫。大丈夫だから……。少しだけ……。もう少しだけ我慢して鏡花ねえ」

優しく頭を撫でてくる。同時に唇を寄せ、またキスをしてきた。

「んちゅっ、ちゅるっ。くちゅっ……。レロレロお。ちゅっちゅっちゅ」

舌が挿し込まれる。当然の様に鏡花はこれに自分の舌を絡めた。何故かとても安らぐ心。そのお陰か、棒に対する苦しみは一瞬和らぐ。

むじゅっ。みぢっ、みぢみぢみぢい……。

「んっ——ふああっ！ あっあっ……。あああああ」

肉棒が根元まで沈み込む。なにかが破れるような音が聞こえた気がした。

（お、奥まで……。か、和彦のが届いている……）

結合部から破瓜の血がタラリッと流れ落ちていく。ビクッビクッと肢体が震えた。走る痛み。

「き、鏡花ねえの腔中……す、凄く温かいよ。き、鏡花ねえは大丈夫？ 痛くない？」

ソツとこちらの頬を手で撫でながら、優しく語りかけてきた。

「あ、ああ……。大丈夫だ。大丈夫だよ和彦。感じる。お前を私の腔中に……。凄くドク

ドクいつてるよ」

痛みはある。けれど大丈夫という言葉は本心からのものだった。何故だ？ 痛いはずなのに、とても心地いい。幸せだった。

「お前の好きなように動いていいぞ和彦。わ、私で気持ちよくなってくれ……。んちゅつ、ちゅうつ。くちゆるう」

「またも口付け。」

ちゅくつ、くちゆるつ。ちゅぶつちゅぶつちゅぶつ……。ちゆるるるう……。

激しく舌を蠢かせながら、互いの口腔を吸い、唾液を交換し合った。

「んつくつ！ ふんんんん」

（う、動いた。わ、私の膣中で和彦のが動いた。ああ……。こ、擦ってる。わ、私の膣中を和彦のペニスが擦ってるう）

同時に幼馴染みはゆつくりとこちらを氣遣うように腰を動かし始める。巨棒が膣壁を擦りあげる感覚に、口付けを続けながらくぐもった吐息を漏らした。

はあつはあつと幼馴染みも呼吸を荒くしていく。

「ちゅくつ、くちゅつ、ちゅつちゅつ……。んああ……。はあつはあつ……。き、気持ちいいか？ わ、私の膣中で気持ちよくなってるか？」

「き、気持ちいいよ。鏡花ねえのオマ○コ凄く気持ちいい。こんなに締め付けてくるなんて……。ち、ちんちんが溶けちゃいそうだよ」

「そ、そうか……。な、なら、もっと激しく動いていいぞ。もっと私を犯していいぞ」
自分の身体で和彦が気持ちよくなっている——そう考えると下腹部がより疼いた。ジュワリッと溢れ出す愛液量も増える。

「だ、だけど……」

それでも和彦は気遣いを見せる。その優しさが嬉しい。

「わ、私は大丈夫だから。だ、だから……。んっんっ、わ、私でもっと……。もつとき、気持ちよくなってくれ。私はか、和彦のことが……。す……。好きだ。だ、だから、わ、私でき、気持ちよくなつて欲しいんだ」

何故だろう？ 繋がり合っていると愛おしさが溢れ出してくる。自然と好きだという言葉が口をついた。

「き、鏡花ねえ!!」

告白が和彦を昂ぶらせる。

「ちゅふっ!! んんんんっ! んちゅっ」

キス。キスキスキス。一体今日何度目だろう？ 最早数えることもできなかつた。
じゅぐっ、ぐじゅっ、じゅっじゅうっじゅっじゅう。

「んっふう。んちゅっ、ちゅぷっ……。き、キス……。気持ちいい……。ふっちゅ、ちゅっちゅちゅんんんん」

（あ、あんな。う、動いてる。わ、私の膣中で和彦のペニスが動いてる。あつ、くふっ！

んんんん。は、激しい。あつあつ、凄い。こ、これ、わ、私のお、奥、奥まで届くつ）
ただキスだけではない。貪欲なまでに口腔を貪りながら、激しく腰を振り出してきた。
じゅぐつじゅぐつじゅぐつじゅぐつ！

何度も何度も膣奥をペニスが叩く。そのたびに身が引き裂かれるような痛みが走った。
だが、感じるものは決して痛みだけではない。それ以上に、肉体は悦楽を覚え始めていた。
ズンツズンツと膣奥を叩かれるたび、全身が甘く痺れる。巨棒で蜜壺を擦りあげられる
たび、愛液は更に溢れ出した。肉棒を叩き付けられる圧力によってブユツブユツと周
囲に飛び散る。

「鏡花ねえ……んちゅつ、ちゅつちゅつちゅつちゅつちゅつ。鏡花ねえ鏡花ねえ鏡花ねえ」

何度も呼ばれる名前。どうしてだろう？ それを聞くたびに、心の中が幸福感で満たさ
れていく様な気分になった。より身体は快楽を覚える。

「か、和彦……んっああっ！ んっんっんんん。ちゅぷつ、ぺちゅつ、ちゅるるるう。
あつあつ……和彦。和彦和彦和彦お」

愛おしさが爆発しそうだった。幼馴染みと同じく、何度も名を叫ぶ。

ギシツギシツギシツギシツ。

床が激しく軋んだ。全身が汗に塗れる。重なり合う身体と身体。肢体と肢体が溶け、混
ざり合い、一つになっていくような感覚を覚えた。

「き、鏡花ねえ。も、もう……」

やがて幼馴染みは限界を告げてくる。この言葉を証明するように、膣中のペニスは挿入時よりも一回り以上大きくなっていくように感じた。特に亀頭部など今にも破裂しそうなほどである。

「い、いいぞ。だ、射精して……あつあつあつ、い、いいぞ……。沢山。沢山……ふあああ、だ、射精して、くれ！ んんんん」

「うん。射精すね。鏡花ねえに沢山射精すね」

頷くと共に、幼馴染みは更にピストン速度を上げた。

ぶじゅつ、ぐじゅつぐじゅつぐじゅつ、ぶぐじゅつううつ！

「ふっく！ あつ！ そつれ、い、いいい！ あつあつ、ふあああああ！」

（は、はげつしい。す、すつごい。こんな、何度もお、奥——奥を叩いてくる。ふっく。こ、これ、く、来るっ！ わ、私も来るう）

挿入に合わせて性感が増幅していく。初めてのセックス——だというのにこんなに気持ちよくなつていいのだろうかど疑問すら覚えるほどだった。だからといって止まることなどできない。覚える愉悅に流されるように、いつしか鏡花自身も腰を振り始めていた。

床が軋む音とぬちゃぬちゃという淫靡なピストン音、そして「あつあつ」と漏れる艶やかな嬌声が混ざり合う。

「で、射精るっ！ 射精るよ鏡花ねえっ!!」

ピクピクツと膣中で肉棒が痙攣した。ジューブツとペニス引き抜かれる。そして——



びゅぶつ！ どびゅぶつ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅゆるるうっ！

「んあああつ！ あ、熱い。あつあつ、わ、私も私もお！」

多量の白濁液が撃ち放たれた。濃厚な熱液が下腹部を濡らす。その熱気は、限界まで昂ぶっていた鏡花の肉体を絶頂に押し上げるには十分すぎるほどのものだった。

「んっんっ、んんんんんん！ い、絶頂く！ 絶頂くうううっ!!」

視界が白く染まる。小刻みに痙攣する肢体。キュウツと背中が反る。全身から甘ったるい発情臭を含んだ汗が溢れ出した。手足先の指で布団のシーツを掴みながら、蕩けるような絶頂感に浸った。

「あ……あはあああ……」

ホウツと熱い吐息を漏らす。このまま眠りに落ちたくなるような、心地いい脱力感が全身を包み込んでいた。

「鏡花ねえ……。好きだよ」

改めて気持ちを伝えてくると共に、キスをしてくる和彦。

「んちゅっ……わ、私もだ……」

これに答えるように舌を絡ませ、鏡花も頷く。

身体だけじゃない。気持ちまで繋がりが合っているような気がして、とても幸せだった。

*

(なんて……私はなんてことをしてしまったんだ……)

だが、幸福感は長くは続かない。

幸せだという気持ちが大きかった分寧ろ、後からやってくる後悔の念はより大きくなってしまった。

幸せそうな表情を浮かべながら隣で眠っている和彦を見て、鏡花は唇を噛み、自分の身体を抱き締めた。

「すまない。すまない和彦……。私は、私は最低だ……」

自身の欲望の赴くままに催眠なんかを使い、和彦を弄んでしまった。

これではとてもではないが、村雨家の跡継ぎに相応しい人間——母の様な立派な人間になることなんかできない。

(馬鹿っ！ 馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿っ！)

何度も心の中で自身を罵った。

同時に決意する。

(もう、これでもうおしまいだ。今度こそ最後だ。もう、もう二度と私は催眠なんか使わない。これで、これで最後だ)

何度目かも分からない決意を——。

チュツ、クチュツ!! チュツチュツチュツ!

柔肉に何度も唇が押しつけられる。伝わってくるのは生温かく、柔らかな唇の感触。刺激を受けるたびにヒクツヒクツと肢体は震えた。

「んっふ——ふんっ……。くふううう……」

自然声を漏らしそうになってしまいが、無理矢理拘束された状態でキスをされて感じるなんて姿を見せるわけにはいかず、必死に口を引き結ぶ。

「あれ? もしかして感じてるの? だったらいいよ。遠慮せずに声を出しても」

「か、感じてなんかな——っい。ふうっふううう……。こ、こんなの、む、むいみっだ。だからも、もうやめろ!」

「無意味? そうは思わないなあ。ほくんと鏡花ねえって頑固だよ。ほら、素直になつてよ。無理矢理おっぱい弄られて、感じちゃってるんでしょ?」

んちゅっ、ぺちゅっ、ぺろちゅう……。

口付けだけでは終わらない。今度は舌を伸ばし、円を描くように乳房を舐め始めた。

ツツツと舌先が白肌に唾液跡を残す。明らかな性感を伴ったくすぐられているような感覚が走った。

「ひあっ! あんっ……だ、だめえっ……」

敏感に肉体は反応してしまう。抑えていた甘い悲鳴も漏らしてしまった。愉悦の色が混じった嬌声が響く。これを聞いた和彦は嬉しそうに笑うと共に、舌先でなぞるだけでなく、

今度は柔肉に吸い付いても来た。

「くひっ! す、吸うなっ! 舐めるなあ」

激しい吸引によつて、白肌にキスマークが残る。

ちゅぶっ、ちゅぶるるう。

「や、やめつろ。こ、こんなのおかしい! だ、だめっだあ……あっあっ、し、しちやいけない。ま、まちがつて——つるうっ!」

乳房全体が唾液に塗れていく。電灯の明かりを反射して、胸が妖しく輝いた。

「気持ちいいなら気持ちいいって素直にいいなよ。我慢は身体に毒だよ」

「き、気持ちよくなんなつ……」

「嘘ついたつて無駄だつて。だつてさ、こんなに鏡花ねえの乳首勃起してるよ」
ピンツと乳頭を指で弾いてくる。

「んひあっ!」

瞬間、背筋を雷光のような性感が駆け抜けた。

「あっ……ふああああ……」

僅かの間だったけれど、思考が麻痺する。

「あれ? もしかして軽く絶頂っちゃった?」

この様を見て嬉しそうに和彦は笑った。

「い、絶頂つてない! こ、こんなことでい、絶頂くはずないだろ!!」

「意地っ張りだなあ。だから嘘についても無駄だっていつてるでしょ。こうされるのがいいんだよね？」

じゅぱっ！　ちゅぱっ！　ちゅうちゅうちゅうつ、くちゅつ、むじゅぱあっ！

否定をしたところで信じてはもらえない。それどころか、より激しく乳房を責められる結果になってしまった。

咄えられる乳房。舌先が乳頭に絡みつき、扱いてくる。頬を窄めて母乳を欲しがる赤子のように吸引してきた。同時に空いた乳房を手で揉んでくる。柔肉に食い込む指。捏ねくり回すように揉まれ、餅のようにあつさりと形は変えられてしまった。

「ふぐっ、くふっ——んんん。ふぐうふぐうふぐう」

揉まれるたび、吸引されるたびに声が漏れそうになってしまふ。それだけは必死に抑えたが、そんな姿を和彦に笑われた。

「無駄な努力はしない方がいいよ。我慢なんて身体に毒だ。素直に快楽を認めなよ。鏡花ねえは淫乱だって僕はよく知ってるんだから、今更格好つけたって無意味だよ」

「い、淫乱なんかじゃな——ふひあっ！　あっ……ふうぐうう……。か、感じてなんかなっ！　こ、こんなのなんでもないっ！」

和彦だけじゃない。自分自身にも言い聞かせるような言葉だった。

しかし、感じないとか、淫乱なんかじゃないとか思えば思うほど、それに比するようには性感は大きくなっていく。

和彦もそれを理解しているらしく、こちらが言葉を発するたびに、より愛撫を激しいものに変えてきた。

ぶじゅばっ、ちゅばっちゅばっちゅばっ。

繰り返し吸引される乳頭が淫靡に濡れる。

（くふうううう。だ、だつめ。駄目なのに。た、耐えないといけないのつに、ひあつ！く、くつる。む、胸を弄られてるだけなのに——わ、私、わたしい！）

湧き上がってくる絶頂感を抑えられない。

カリッと乳首が軽く甘噛みされた。瞬間——

（だ、だめ！い、絶頂くッ——）

「ふっぐ！ んんんんんんんんんんんつ!!」

抑え込み続けてきた愉悦が爆ぜる。頭の中が真っ白になった。自然と腰を突き出してしまふ。何とか嬌声だけは抑えたものの、壊れた玩具みたいに全身は痙攣した。

「は……はああああ……。はひいはひいはひい……」

全身が脱力する。何度も荒い吐息を漏らした。

「あれ？ もしかして絶頂った？」

「い、絶頂ってない……。はあはあ……。わ、私はこ、こんなむ、無理矢理されて絶頂つたりなんかし、しない……」

白い肌を上気させながら全身から汗を垂れ流し、激しく肩を上下させる。その姿は誰が

どう見ても絶頂しているようにしか見えなかったけれど、それだけは認めない。無理矢理
されて感じるなんてことがあっていいはずがない。最後の矜持を振り絞る。

「なるほどね。こんなに濡れてるのに？」

袴が脱がされ、グショグショに濡れた赤いショーツを露わにされた。この下着も簡単に
引き剥がされる。完全に剥き出しとなる花卉は、すっかり濡れそぼり、淫靡な花を開かせ
ていた。肉褌が牡を求めるように蠢いている。

「まるでお漏らししてるみたいだよ」

「ぬ、濡れるのはた、単なる生理現象だ。か、感じてるわけじゃない……」

苦しいいいわけだということは自分でも理解していたが、そういわざるを得ない。そん
な自分が情けなかった。

「まだ意地を張るんだ。でも、どこまで保つかない？」

ニタアツと和彦は笑う。なんだかとても嫌な予感がした。

「ふひっ！ あっあっあっ！ も、もうだつめ、駄目だあ。や、やめる。そ、それ以上は
もうやめ——んんんんん」

ちゅぱっ、くちゅぱっ、ちゅぱっちゅぱっちゅぱっ……。

淫靡な音が鳴り響く。蠢く和彦の舌が、直接肉褌を舐めていた。ピンク色の柔肉を一枚
一枚、丁寧に舐めしゃぶっていく。そのたびに乳房を責められていた時以上の性感が身を

襲った。

全身が弛緩するような性感が走るたび、肢体が震える。ほんの少し舐められるだけで、すぐにでも達してしまいたいようなほどの快楽を覚えた。

（だ、駄目だ。い、絶頂くッ。こ、こんなのた、耐えられない！ だつめだ。も、もう！ もう無理だあ!!）

性感を抑えられない。濁流の様な肉悦に流されるがままに、腰を突き出し、和彦の口に押しつけてしまう。

（い、絶頂く——）

駄目だと思いつつも、湧き上がる快楽に身を任せようとした。

なのに——

「え？ あ……ど、どうして？」

絶頂直前で愛撫が止められる。ヌチャツと膣口に密着していた唇が離された。

「どうしてって何が？」

無邪気な顔で和彦は首を傾げる。

「え……。あ、そ、その……」

何もいえない。思考は完全に混乱していた。

「あれ？ もしかして絶頂きたかったの？ つまり鏡花ねえは感じてたの？ 僕に無理矢理愛撫されて感じるような淫乱だったの？」

わざとらしく首を傾げてみせてくる。

「だったらいいよ。絶頂かせてあげるよ。ただし、僕に……オチンポで淫乱な私のマ○コを犯してください。絶頂きたいんです——つて、お願いしてくれたらね」

「……そ、そんなこと……はあっはあっ……か、感じてなんか……。な、なんでもない……。」

そんな破廉恥な言葉をいえるはずがない——のに、胸がドキドキする。身体が熱く火照った。

「そっか。ふふふ」

どこまでも和彦は楽しそうに笑う。

「い、絶頂つく！ も、もう!! 絶頂つくううう——え？ あ、ま、また……」

再び絶頂直前で愛撫は止められる。これで寸止めされるのは何回目だろうか？ 最早数えている余裕なんかなかった。

(こ、こんなの……お、おかしくなる。わ、私が私じゃなくなってしまう……)

性感に肉体が疼く。繰り返し愛撫された膣口から溢れ出す愛液は、白濁色に染まっていた。チーズみたいに濃厚な発情臭を放つ本気汁。腰は自然と前後に揺れた。

犯して欲しい。絶頂かせて欲しい——本能が訴える。

救いを求めるような視線を和彦に向けてしまう自分がいた。

「どうかしたの？」

こちらが何をいいたいのか理解しているのは間違いないだろう。しかし、和彦は惚ける。こちらからねだらない限り、絶対に絶頂かせてくれることはないだろう。

「わ、分かっているくせに……」

意地悪だ。こんな意地悪な和彦知らない。

「分かっているって何が？ じっくりと分らないよ」
わざとらしく惚けてみせる。

「……だ、だから……い、絶頂きたい……」

絞り出すような言葉を向けた。

「絶頂きたい？ ふふ、だったらどうすればいいか……。分かるよね？」

分かる。勿論分かっている。和彦の命令に従えばいいそれだけだ。

「そ、そんなはしたないこと……」

「素直になってよ鏡花ねえ。僕は素直な鏡花ねえが大好きだよ」

につこりと和彦は笑う。子供みtainな無邪気な笑みだった。可愛らしい表情に、愛おしさが溢れ出す。

もう耐えられない。これ以上は我慢できなかった。

「……お、おち……オチンポでわ、私のい、淫乱なマ○コをお、犯してくれ……。い、絶頂きたいんだ。我慢できないんだ。だから頼む。わ、私を犯してくれ……」

絞り出すような声で求める。

「よくいえたね鏡花ねえ。分かったよ。たっぷり犯してあげるね」
につこりと和彦は笑った。

同時に身体を俯せにされる。上半身を床につけ、下半身を突き出すような姿勢を取らされた。そして――

ぬじゅっ！　ぐじゅるう！！

「あっ！　ふひっ！　あっあっあっあっ！！　き、きたっ♥　膣中に、私の膣中に和彦のペ、ペニスがきたあ♥」

全裸になった和彦による挿入が始まった。

押し広げられる膣道。下腹部に異物感が広がっていく。身体の足りなかった分を満たされていく様な性感を覚えた。ジュワツと更に愛液が溢れ出る。

「あっふひっ！　大きい。和彦のペニスすごく大きい！！　す、すごいい！　お、おくまっで、奥までくる♥　あっあんん」

巨大な杭を身体に穿たれていくかのようにすらあった。

ズンツと肉先が子宮口に当たる。瞬間――

「届く！　和彦のペニスが私のい、一番奥まで来るのお♥　い、絶頂つく！　マ○コを突かれて私、わ、私いい――い、絶頂く♥　絶頂つくううう♥」

視界が白に染まった。ずっと欲し続けていた絶頂感が爆発する。ただ膣奥まで挿入され

ただけで、鏡花は言い分けできないほどに達していた。

「あれ? もう絶頂っちゃったの? まだ、挿入れただけだよ? うわっ、ホント淫乱なんだね鏡花ねえって」

「い、淫乱でござ、ごみえんなしやい……れも、れも、こ、こんにゃのが、我慢できない……。ふひい……あ、あはあああ……」

だらしなく惚ける顔。普段の凜とした表情はそこにはない。無様なアへ顔を晒していた。「我慢できないか。なら仕方ないなあ。でも、この程度で絶頂って大丈夫? 本番はここからだよ?」

「ほ、ほんば——ふっひいっ!」
じゅごっ!

ぼうつとしながら首を傾げた刹那、膣奥まで挿入されていたペニス引き抜かれていった。カリ首が膣壁を引っかける。肉棒によって内臓が外に引きずり出されてしまうのではないかと思うような、感覚を覚えた。

「ちよ、ら、らっめ! ま、まだらっめだ。い、絶頂ってる。わ、私、い、いってるから、う、動いちゃ駄目だあ」

「そんなの知らないよ。僕は今動きたいんだから」
ずじゅっ!

「ふひあっ! あっあっあっあっ♥ ま、また来た! 奥来たあ♥ い、絶頂く! また、

また絶頂くうっ♥♥♥」

膣口付近まで引き抜かれた肉棒が、再び膣奥に叩き付けられる。途端にまたも絶頂感が身を包んだ。ぶじゅばあつと愛液が結合部から飛び散る。

先程以上の絶頂感だった。気持ちよさで意識が飛びそうになる。しかし——
ぶじゅばつぶじゅばつぶじゅばつ！

「んあつ！ ふひっ!! ひっひっひあああつ！ ま、まった、まだわだち、い、いっでるのに、まったうご、動いてる。激しい、こんらの、は、はげししゅぎるう♥」

休む暇など与えてくれない。和彦は容赦ないピストンを開始した。

パンツパンツパンツと腰と腰がぶつかり合う。そのたびに結合部からはビュッビュッと女蜜が溢れ出た。

「ひ、ひぎゅっ！ ひぎゅひぎゅ、いぎゅのお♥ ま、またいぐ♥ と、とまっらない♥ いぐの止まらない♥ お、おかされてるのに。む、むりやりなのに、き、気持ちいい。気持ちいいのとまりやないのお♥ いっぐ。いぐいぐいぐう♥」

膣奥を何度も亀頭が叩く。そのたびに肉体は達した。絶頂感を抑えることなどできない。頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

「ホント鏡花ねえつてとんでもない変態だよ。犯されてこんなに何度も何度も絶頂くなんて。幻滅だよ」

しかも、ペニスだけでなく、言葉でも責めてくる。



おしっこをかけられたことが悔しい——実はかなり興奮したけど——和彦は、そう鏡花に催眠をかけ、幼馴染みに特性の排尿管を飲ませた。一口飲むだけで尿意デマイオ!! なんていう言葉の意味は分からないけれど、とにかくすぐおしっこがしたくなりそうな薬である。羞恥を感じる状況でお漏らしさせてやる!

「これ……す、すぐに漏れてしまいそうだ……」

「大丈夫大丈夫」

灰色のスポーツブラにショーツだけを身に着けた鏡花がもじもじと太股同士を擦り合わせるが気にしない。

「ほら、これで蓋をしてあげるからね」

ニコニコと笑いながらパイプを取り出し——

ぶぐじゅつ、ぬじゅつ。ぶじゅるるるう。

「おっ! え? あっ、は、挿入ってくるう! こ、これ、お、おかしくないか? な、なんで、お、おしっこを我慢するのに、お、オマ○コには、パイプを挿入れるんだ!!」

ショーツを脇にずらすと、腔に突き込んだ。当然戸惑いの声を鏡花は漏らす。

「どうしてって、おしっこ我慢するにはマ○コにパイプでしょ?」

「……え、あ、そ、そうだな……」

催眠のお陰であっさりこれを受け入れてくれた。ただのお漏らしだけじゃない。もっともっと恥ずかしい目に遭わせてやるんだ!

「で、でも……蓋をしても出そうだ。漏れちゃいそうだ……。と、トイレ、トイレに行かせてくれ。た、頼む……」

「駄目だよ鏡花ねえ。それじゃあ稽古にならない。僕に勝つまでトイレは駄目だよ」
悶える姿がなんだかとても新鮮だった。

「じ、じゃあは、早く始めよう。我慢できないから。は、早くっ！」
「仕方ないなあ。分かったよ」

その状態で木刀を持って立ち合う。剣の腕は間違いなく鏡花の方が上だ。まともにもやり合えば一〇本中九本は間違いなく取られるだろう。しかし、あくまでも、まとも、にやりあつた場合ではない。

いかに鏡花とはいえ、尿意を我慢した状況では実力の半分も発揮できないようだった。すべての立ち合いを和彦が制する。

「た、頼む……。も、もうと、トイレ……。トイレに行かせてくれえ」
必死になって訴えてくる姿。普段とはまるで立場が逆転していた。

「も、もう無理なんだ。た、頼む……。も、もう漏れる。おしっこ漏れてしまうからあ。た、頼むう」

今にも泣き出しそうな表情で懇願してくる。その姿にゾクゾクしたものを感じつつ、
「仕方ないなあ。それじゃあ行ってもいいよ」
と許可を下した。



「あ、ありがとう。ありがとう」

「別に礼なんていわなくていいよ。それじゃあトイレ行く前にまずこれを外すね」

「へ？ あへっ！ ふひっ、抜ける!! バイブ抜けるう！ あ、ふっひ！ え、そ、それ、蓋、蓋だよな？ 蓋抜かれたら出る。漏れちゃうう！」

勿論ただでトイレに行かせるつもりはない。腔口に挿し込んだバイブに手をかけ、それを容赦なく引き抜いた。暗示によって尿意を我慢するのにバイブが必要だと思い込んでいた鏡花は、焦ったような声を上げた。

ぶじゅぽっ！ じゅぽおっ！

「——ふっひ!! こつれ、も、漏れる。漏れちゃう」

ガクガクと膝が震える。

「え、ここでおしっこしちゃうの？」

「ち、ちがつう。こんな、こんなところでお、おしっこなんかしない。し、したくないのにい。ふっく、駄目だ。が、我慢できない」

スポーツブラだけを身に着け、身体中から汗を垂れ流す鏡花は、身動き一つまともにとることができないらしい。カクカクと膝を震わせながら——

「も、漏れるう！」

じよぽっ！ じよじよじよっ！ じよるのおじよぽあなああああああ！

「ひいっ！ おしっこ！ おしっこ出てる。も、漏らしてしまってる。あつ、と、止まら

ない。おしっこ止まらない！ くひっ、ひああああ！ ど、どうしてだ？ か、感じる。おしっこで感じてる。い、絶頂く！ おしっこで、おしっこで絶頂くうううう！」

散々我慢して敏感になっていたらしく、失禁しながら鏡花は達した。

（絶頂ってる。鏡花ねえがお漏らしして絶頂ってる……。凄い。あの鏡花ねえが……）

いくら催眠をかけているとはいえ、普段の鏡花からは想像することもできない状況に、和彦の興奮も高まっていく。

（だ、駄目で、で、射精るっ！ 僕もで、射精るっ!!）

肉棒に触れてすらいなのに、射精感が膨れあがり、爆発した――

「で、射精るっ！」

どびゅっ！ びゅっびゅっびゅっ、どっつびゆるるう!!

排尿時にも似た性感が走る。肉棒を痙攣させ、精液を撃ち放った。

「これはまた、沢山射精たな」

「――へ？」

瞬間、目の前の光景がグニヤリツと歪んだ。同時に泣きながら汚水を漏らしていたはずの鏡花の姿も消える。代わりに不適な笑みを浮かべる幼馴染みの姿が視界に映った。

「あ、あれ？ ど、どういうこと？」

場所も道場ではない。見慣れた鏡花の部屋だった。

「ど、どうして？ うひあっ！ あっあっ、で、でっる！ 射精るのが止まらない!!」

戸惑いつつ、射精を続ける。自分の意思で絶頂を止めることなどできなかった。

「なんで？ な、何が起きてるの？ くああああ」

性感に溺れながら疑問を口にする。すると鏡花はより口端を上げ、どこかサディスティックな表情を浮かべた。

「和彦が悪さしないようにしてやったんだ。つまりな、お前が催眠を使った瞬間、私がそれを上書きするような催眠をかけたんだよ。簡単にいえば、お前は私に催眠をかけているつもりでいて、ずっと私の催眠下にいたってわけだ」

「そ、そんなことが……」

「ふふふ、催眠の掛け合いでは私の勝ちだな。一日の長があるってわけだ。どうだ、手玉に取られた気分は」

クククツと邪悪な笑みさえも漏らす。なんだかとても楽しそうだった。

が、そんな鏡花に和彦は笑う。

「さて、それはどうかな鏡花ねえ？」

「なに？ どういうこ——ふひっ！ な、なんだ？ なんだこれ？ い、絶頂くツ!? ど、どうして？ 絶頂つく♥ イクイクイク絶頂つくううう♥」

*

性感が走る。唐突に増幅した快楽が全身を包み込み、鏡花を絶頂へと押し上げた。

ぶじよっ、じよぼろろお！

「お、おしっこ。おしっこ出てるう」

すっかり絶頂と同時に失禁という癖が付いてしまった尿道が開き、黄金水を漏らした。ぐにゃあああつ！

それと共に視界が歪む。

「な、なんだこれ？ にやんだこりえ？」

今まで見ていた光景はすべて幻。気がつくとも鏡花は後背位で和彦と繋がり合っていた。パンッパンッパンッ。

「ひっひっひ！ あ、あんっあんっ♥ な、なんで？ ど、どうしてえ？」

腰と腰がぶつかり合い、愛液が飛び散る。ズンズンッというピストンのリズムと共に肉体を襲う官能の疼きが襲った。

「サイミンだ！ 残念だったね鏡花ねえ。実は鏡花ねえが見ていたのは全部僕が催眠で見た幻なんだよ。本当の勝利者は僕ってわけ。さあ、たっぷり射精してあげるからね」

「そ、しよんな、ば、馬鹿な——ふああああつ！ で、でつてる！ あつあつあつ、な、膣中に、膣中に射精てるう♥ 絶頂つく♥ 絶頂くのお♥」

流し込まれる白濁液の熱気に性感を覚えながら、鏡花は何度も肉体を震わせて絶頂の快楽に堕ち——と見せかけて、鏡花は笑った。

「あ？ ど、どうして？ うあつ！ し、搾り取られる。ぼ、僕のおちんちんから搾り取られるうっ！」

再び世界が変わる。

今度悲鳴を上げたのは和彦だった。和彦の上に跨がり、鏡花は腰を振る。

「——いつから私が催眠を使っていないと錯覚していた？　ほ、本当に催眠をかけていたのはわたし——んひいひい♥」

またも変わる世界。

今度挿入されるのは——以下略。

なんだかんだでとつても気持ちよく、幸せな時間だった。

*

正直言うと自分達の生活は非常にタダレたものだ。破廉恥この上ない——と、鏡花自身理解している。学生ならば学生らしい生活をしなければならぬのに……。

（しかも私はただの学生じゃない。風紀委員だぞ。風紀を正さなければならぬ私が、こんなことをしてはならない!!）

何度も自分自身に言い聞かせた。

だというのに、何故だろう？　和彦を見ると身体が熱くなってくる。

彼と一緒にいたい。彼と抱き合いたい。彼と一つになりたい——そう思ってしまう自分を抑えることなんかできなかつた。

それどころか、

（なんで隠さないといけないんだ？　私達は本気で好き合っているんだ。どれだけ想い合

っているかをみんなにも見せてやりたい)

なんてことまで考えてしまう。

学園内でいちやつく生徒達の気持ちがあつてしまった。

だからこそ、辛い。自分はずっと取り締まってきた側なのに……。

「多分……色々なことに最近集中できない理由はそのせいなんだろうな……」

気がつけば和彦にこのことを相談していた。

「僕も鏡花ねえと同じ気持ちだよ。だから、ぼ、僕達が付き合っているってみんなに話してもいいんじゃないかな？ で、男女交際に関する活動はもう止めにして……」

「駄目だ！ それだけは駄目だ!!」

少し心が揺らいだけれど、その意見は否定する。

「だ、だったら……」

和彦は顎に手を当てうゝむと考えるような素振りを見せた。そして「そうだ！」と手を打つ。

「いいことを思いついた」

そういつて笑った。

昼休み——鏡花は和彦の教室へ向かった。昼に来てよといわれた為である。学年違いの教室に入るのは緊張する。ましてや自分はそれなりに有名人——自覚はある——なので、

間違ひなく目立ってしまうことだろう。

(まあそこは風紀活動の一環だとしてもいつておけばいいか)

などと思いつつも、彼^レの教室で、彼^レと会うと考えると、なんだかとても胸がドキドキしてきた。

「し、失礼するぞ」

一声かけ、教室のドアを開ける。

「あ、先輩。待ってましたよ」

「駿河ならあそこにいますよ」

するとすぐに鏡花の存在に生徒達は気がついた。

「え？ あ、ああ……」

不思議なことに、なんだかみんなとてもフレンドリーである。一体どういうことだ？

戸惑いつつも、教室の窓際、一番後ろという実に好立地な場所にある和彦の机に向かった。

「鏡花ねえ来てくれてありがと」

「あ、ああ」

「お礼のキスね」

「——へ？ んっ、んんんんん」

瞬間、唐突にキスをされた。唇と唇が重なり合う。あまりに唐突な出来事に、反応することができなかつた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!